

人里離れた山の中の洞窟で夜な夜な恥辱的な慣例儀式が行われている。始まりは古く現代までも続いている。

この洞窟のなかには、湖が広がっている。その湖の真ん中にボツンと浮島がある。

その浮島の大きさは十畳の部屋が二つある社が立つほどには大きく、その浮島にはピンク色のところみのある湯が湧き出ていた。

湧き出ている湯の成分が固まってできた結晶石の岩に囲まれた岩場は中央に行くほど色が濃く深くなっている。

この村に生まれてきた少年達は、みな物心つく頃にはこのピンクの媚薬を毎日飲まされる。

徐々に慣らししていき、媚薬の効きが良いものが儀式の贅に選ばれるためだ。

そして今宵この哀れな贅に選ばれた少年が両手を縄で括られて罪人のように歩かされている。

名前はキノ。

毎年村からひとりだけ選ばれる。

体力も精力もある贅を前にして老人どもはにやにやとイヤらしい顔を晒す。

「さあて、キノお前の名前はこれから無名様だよ。ここでは俗世の名前は捨てること」と

無慈悲に告げられた言葉にキノ改無名は媚薬の効いたぼやけた頭で「無名……」と呟く。

その目はどろりと溶けた蜂蜜のように混濁した意識を表していた。

十日前から徐々に媚薬の量を一日ごと増やして摂取した体は、思考を低下させ胸の突起や性器が敏感に作り替えられていた。

無名は、歩いているだけで服が擦れるたびに、体をビクッと小さく振るわせた。

「さあ、この神聖な媚薬のるつぽへ入りなさい。ああ、入る前に口枷と目隠しをさせろ」

ここの宮の長老が、無名の周りいる調教者達に命じる。

無名は、抵抗することなく口を開きそのあどけない瑞々しい小さな口に黒く禍々しい玉を入れられ、口を閉ぎせぬよう後ろできつく括られる。目には黒い絹を当て決して解けないようにきつく結ばれた。

「ふあっ」

目隠しをされるときに、無名の胸の突起に絹の先端が掠れて甘い吐息が漏れる。触られるのを待っているかのようなないじらしい突起が赤く小粒のようにたっている。

「無名様は、淫乱な身体じゃのう」

衆人環視で縄で括られていく。

木の棒に縄の先端をくくりつけ、そのまま媚薬のるつばへ無名を浸していく。

まずは、腰骨のあたりまで漬ける。そうすると縛られた足首を解けることはないのに振り解こうと力が込められているのがわかる。

腰が淫らに動き、その動きにまた翻弄される。

「ううううー。ふうううううんん」

苦しげな無名の声。

無慈悲にも頭の上まで全て、媚薬の中に下ろしていく。口にはめられた玉から酸素が送られているため酸欠にはならないが、全身を媚薬に蝕まれて無名は気が狂いそうだった。

全身を針で細かく刺されているような、筆の先でくすぐられているような感覚が続く。何分経ったのか、何時間経ったのか時間の感覚が無くなるほど媚薬の中にいた。実際は、数時間程度だったが、無名にとつては時間の感覚が無くなるほど長く感じられていた。

「はあつ。はつ、はつあんあつ」

口の玉を引き抜かれると口から喘ぎ声が止まらない。

（身体中触って欲しい、苦しい）

無名は体が内からほてって、息が詰まっている。藁の上に置かれて、服を剥ぎ取られると縄師が手足の縄を解いていく。

「身体中があつい。苦しい。あついよお」

解いたそばから、縄師は亀甲縛りを施していく。

「んあつ。くるしいー。はあつ」

縄が股を通る時、丸くこぶ状にした結び目を陰茎と菊穴のあいだ会陰にギュッと押し付けると無名は背をしならせビクビクと体が跳ねた。

媚薬を大量に摂取した体には身体の奥に響いて苦しいのだろう、背をのけぞられながら快感を感じて逃がそうと哀れにも激しく跳ねる。

跳ねる身体を押さえつけるよう両手を束ねて頭上に押し付けられる。

「はなせえつ！はっう。あああつん」

ただでさえ身動きができない体を押さえつけられ、快感に悶えるしかない。ある男は陰茎に手を伸ばし裏筋を下から上へ撫であげる。

くちゅくちゅと音が鳴る。

「そらっここも立派に立ち上げて。やさしく虐めてやるからな」

声は重低音で落ち着きあるが、その手は快感を押し上げようと的確に撫であげる。

「おかしくなるうゝ。やめてっ!!」

無名が制止の声をあげても、手の動きは止められない。

まわりで視姦していた者たちもワラワラと集まり無名の身体を弄り始める。

ある者は、優しく乳輪の周りをくるくると愛撫して無名様をむずがらせる。

「無名様はここをこんなに立たせてはしたないな。ほらっ、無名様ここはなんで呼ぶんだ」

「わかんないっ！わかんないよおゝ。あああああ」

「ほらっ言わないと僕の乳首をいじめてくださいって。言わないとこのまま触らないで焦らすぞ。言いなさい」

「ぼくうのあっん！ンアあ！乳首い！乳首いじめてえーアあー……カハッ！！！なんか入ってきたあ！！怖いっ！助けてえー」

ある者は、肛門に媚薬を太めの注射器で入れ込む。

一リットル以上もの媚薬を注ぎ込まれ腹が膨らむ。

媚薬を注ぎ込まれたアナルから漏れ出てこないように張り方で栓をする。

「んんー。んんうー」

（媚薬を入られた腹の中が熱くて痒い）

無名は目隠しをされていて周りを確認することができない。見えないからこそ感覚

が尖る。

「さきっぽっ……さきっぽっ……」

胸の頂きと陰部の先端を重点的に擦られる。

媚薬で敏感になった身には辛すぎる快感。

涙を流しながら快感を求めて高まる。

無名は感じたことのない感覚に戸惑っていた。混濁する意識の中で体の内側がずく
んずくんと疼くを感じる。

「アああー……ん！ッアアー……」

「ほお、なかなか」

「そうですね。さすが無名様。才能があるようで何より」

「媚薬と張り方だけで、メスイキなさるとは」

「さて、それでは屋敷へ運びましょうか」

長老が厳かな言葉をにやけ顔ではなつ。

無名は意識を飛ばしているため、他の男たちの手によって運ばれる。

一般的な屋敷の門を潜るとすぐに畳の部屋へつながる土間になっている。

土間には岩の男根が猛々しく祀っている。

畳はよく清められ清潔感のある室内。だがしかし、壁や棚の上、小箱の中には卑猥な道具が多種多様に用意されていた。やはり、調教目的の屋敷なのだ。

目が覚めない無名を良いことに、屋敷につくと三角木馬へ乗せる。三角木馬の上には梁型があり、そこに貫かれるように座らせる。

ぬちや

「うう……」

載せたはずみで声が溢れる。

足はつかず、下から縄を足首に括られ身動きを取れないようにし、上半身が転げないように梁から垂れ下がった太い帯に縄を通しておく。

目隠しはされたまま。

媚薬を注がれた腹の熱が、三角木馬の梁型に刺激され快感を溜めていく。

意識はないが、吐息は荒く時折呻き声がこだまする。

「いやあ、淫靡な様ですな。毎年毎年、無名様をお慰めしている我々ですが、今年の無名様は一段といやらしい。初めてのことに泣き叫び、痛がる子も多いなかで、いや……なかなか」

顎を撫でながら男は言う。

ここに集まっているものは、村の男衆。普段は他の村人と変わらず田畑を耕し暮らす百姓どもだ。そのなかで、無名様を慰め、教えを施す役目を担っているものがある。それが、今集まっているもの達だ。ほぼ全てのものが、夫婦の契りを交わしている女房もちである。しかし、この因習に携わる誇りを持っている。

「そういえば、無名様は昨年の無白様の従兄弟であつたな……。のう、豊前^{ふぜん}」

「……………」

群衆の一人が、緊縛の調整をしている男へ向かつて質問をする。

白髪が混じる髪を短くそろえた、四十過ぎの中肉中背の男だ。

名を豊前ぶぜんと言う。無骨な手をなめらかに動かして、無名のからだを美しく整えていく。

手捌きは迷いなく、的確に。

表情を変えずに、ガラス玉のような瞳で無名の体を写し、ひとりの男の子を乱れさせていく。

「はあ……はああん」

ぴちゃぴちゃと筆で乳首を縁を描くように撫でる。

媚薬を染み込ませた筆先で乳輪の外側からくるくると徐々に先っぽへまわしていく。

反対の頂は、指でトントントンとリズムカルにフェザータッチ。

「んっ……ふう……んんう……」

意識のない無名は、微睡のなか確かに快感を拾っていく。真っ白なカラダに色を覚えさせるように、教え込んでいく。

九法と呼ばれた男は、無駄口をたたくことなく、淡々と仕事を終えた。

無名は、今日のお勤めを終え十畳間の布団に寝かされた。尻には、細い張り型を入れ込んでいるが、それ以外は何もされず安らかな寝息をたてている。

あどけないすべすべの頬は、情事のあとなのか、桃色にほてっている。

まつ毛は長く、銀色の月の光をうけて、頬に影が伸びた。

十畳間は外に開けた縁側が南向きにあり、開かれた障子の間から月光が入る。洞窟の一部はぼっかりと、大穴が開いていた。

先ほど、名前がでた無白様は先代を務めた少年だった。無名として、この神聖な洞やで仕込まれた少年は『無』のつく名前を神である御蛤様おはまごまから授かるのだった。神と一晚過ごした少年は、名を授かり聖なるモノとなる。そのあと、ご利益のある聖なるモノとなった少年を、ときの権力者や力のある豪族、はたまた高貴なお方である貴族にお納めするのだ。

納められた少年たちは、一様に夜の相手を定められた。他のどのものとも違うからだまには誰も抗えない。一度でもその身を手に入れたものは、忘れられない。二度と陽の目をみせることもなく、屋敷の奥で大切に監禁されることが多かった。

納められた後、対応が良いところでは日中苦勞なく過ごせるものもいたが一部の例外であった。殆どのものが、一日中まぐわい、その無理が祟って成人前に儂おろくなってしまう。そのため、需要ばかりが増えるが供給が足りることは無かった。

御蛤様おはまざまとまぐあうのは、月が隠れた新月の夜のみ。それまで、身体を高めあげ、心を墮としこむ。

月の光がかすかに差し込む薄暗い洞窟の中では、蠟燭の炎がか細く揺れていた。



屋敷の梁に縄をくくりつけ、無名は吊り上げられていた。

腕は背面で拘束されて、片足を太ももと足首を縄で纏められている。

調教は日を追うごとに執拗に苛烈になっていく。

「今日もよろしくな」

「……はい……よろしく願います」

（縄が食い込んで辛い……痺れてジンジンする。熱っ……）

無名は縄に縛られて軽い痺れに翻弄されている。また縄をされ、会陰にコブ状のシコリがあり己の体重がかかるたび甘い痺れをもたらしている。足がガクガクと震える。快感を追うごとに足に力が入らず、縄に身をのせてしまう。その度に電気のように脊髄を貫く絶頂を味わっていた。

「あっん……はあああ……あっんう………はあはあ」

「いい感じにあつたまってきたな。今日は無名様の好きな鞭打ちと、はじめてで辛いだろうが電気を使って責めていく。反応も感度も良くなってる。次の満月の夜までに、

はまさまの寵愛に応えられる身体に変えるぞ」

豊前は、無名に淡々と言う。ぼんやりして頭が働かない無名は、頑張って内容を理解しようとするが、その度に縄の刺激に反応してしまい、ほんの少しも理解できない。

だが、今日も苦しいまで気持ちよくなるんだなと諦めにも似たような達観が浮かぶだけだ。

「先生え……、薬ちよおーだっい……あつ！……あつん……」

「まだあげられないなあ」

出てくる吐息は色っぽい。

媚薬を求める無名。徐々に体に馴染んだ媚薬は、狂おしいほどに常習性がある。快感を忘れられず、媚薬を求めるようになる。

豊前は、無名の尻の穴に媚薬を塗り込んだ張型をクルクルと穴の淵に塗り込む。

「早くっ！早く入れてええ」

「もう少し。焦らした分だけヨクなるぞ」

もどかしげに体をくねらせ、手を拘束している縄を軋らす。どうにかこのもどかしさを逃したいのか、後ろでに縛られた縄から抜け出そうと腕を動かすが身が振れるだけで縄は弛まず拘束する。

「うっ、うぐウウウ——……っ」

「ほらっ、この突起に意識をずらせるか？辛さが紛れる」

そう言っ豊前は胸の突起にバネ式のクリップをまず右に挟んだ。

挟んだ突起の先に指で刺激を送る。

「ああっ……あつ、やつ先生ダメッ……はうッ……」

「ダメじゃないだろ。気持ちよくしてくれたら、なんで言うんだ？」

「いやっ！いやっだつて！」

「ん？」

指の刺激を止める。

刺激が止まったことで、快感の波が収まってきた無名は、イヤイヤと首を振る。

「なんだ？首ばつか振ってても、気持ちよくなんてなれねーぞ。ほら、言え」